

20年前、マリさん（アサヒ精版印刷社長 築山万里子さん）が名乗るようになったプリンティングディレクター。紙選びから製版、印刷、製本までの全工程を仕切る印刷の監督、と言えばいいか。「表現のお手伝いができる。これやと思いました。自信持って言えるようになるまで、5年以上かかったけど……」

マリさんはそう言うが、この頃、コピーライターの村上美香さん、イラストレーターの仲里カズヒロさんとチームを組んだ仕事は、怖いものなしだった。この3人を周囲は「大人になってからの幼なじみ」と評した。秀逸な表現だと思う。

依頼主に企画を売り込むプレゼンテーションは「むっちゃ勝ってました。根拠のない自信があったから」とマリさんが言えば、「万里子は『愛で乗り切ろう』って言いながら、絶対あきらめない」と美香さん。根拠のない自信も、愛で乗り切るのも若さの特権。20代の勢いはとどまることを知らない。

美香さんと絵師の東學さんが曲折あって、「株式会社一八八」の名のもと、ミナミの元スナックでデザインの仕事を仕切り直した2001年。一八八とアサヒ精版が組んで、「年に1回、自分たちのプレゼンテーションを6月29日にやろう」というアートイベント「629」を始めた。自分の等身大のポスターを作ったり、映像ごっこをしてみたり、絵師が組んでのライブペインティングあり……。

07年には、6月29日にちなんだ629の電話帳のように分厚い本を作った。「ノンブル（ページ番号）<sup>けんしゅうえん</sup>」<sup>けんしゅうえん</sup>だけで大変（マリさん）、「1カ月くらい、腱鞘炎になるぐらいずっと文章書いてた」（美香さん）とそれぞれが語っている本をバラバラとめくっていたら、マリさんの父敬志朗さんが、アサヒ精版から印刷機をなくした理由を語っていた。

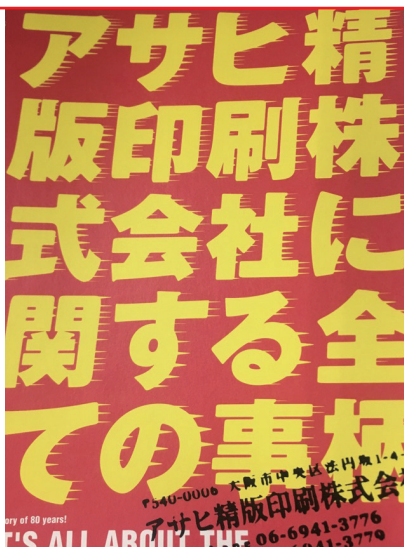
「僕はなんもでけん。なんもでけんから、出逢った人を大事にしようと思うてたんや。この業界で生き残っていくためには？と考えたとき、印刷工場も機械も手放すべきやと思った。機械があると、その機械を使わんとあかんやろ。もっと自分の身を軽くして、上手なデザイナー、上手な印刷工場と付き合いたいと思ったんや。人だけが財産やから」

そして、こんなことも。

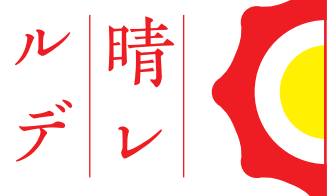
「大量印刷するだけゆう仕事は、大手にまかせといたらええと思うんや。僕は信頼関係のなかで、コンセプトから一緒にものづくりがしたいから」

父娘は同じことを思っていたんだ。マリさんはパパの遺伝子を受け継いだんかな。いち早くデザインの重要性に気付き、デザイナーが「図案家」、コピーライターが「文案家」と呼ばれていた時代から、クリエイターとの付き合いを何より大事にしたパパの。もっともパパは「呑むのは僕の仕事でも遊びでもあるから」とうそぶいてて、そういうところは全然似てないけど……。

「629」を始めた2年後の03年、マリさんと美香さんにでかい仕事が舞い込んできた。



629の本の中扉には、こんな文句が



# 愛で 切り ぬき る



文・松井宏員 — デザイン・シマダタモツ